

欧州現地調査報告（報告：石田憲）

2016年の夏は、7月28日から9月12日までの間、ヨーロッパへ資料調査に行かせて頂きました。EU 離脱のイギリス、難民最前線のマルタ、オリンピック招致問題に揺れるローマと、何れも政治的に考えさせられる旅でもありました。とりわけ市民が政治に関わるという意味について、各国は様々な形で問われている気がしています。

まず、ロンドンでは知人たちに会う度、イギリスの国民投票について尋ねました。大学関係者は殆どの場合、離脱に反対の立場で、外国人労働者の増加、ポピュリズム、さらには外からの干渉に対する嫌悪感などを、離脱選択の要因として挙げていました。ただ、そうした説明は日本でも繰り返し聞いていた内容に近く、それ程ピンと来るものではありませんでした。一番興味深かったのは、実費で泊めて貰っていた家主の反応で、徹頭徹尾非政治的な態度を保っている彼女は、吐き捨てるように「これでまたしばらく mess が続くわ」と特に原因に触れることなく話を打ち切ったのですが、彼女と話していると、全く異なる角度からイギリスの一側面が見えてきました。

彼女は美術や音楽に強い関心を抱いていて、そうした活動に多くの時間を割いているのですが、ある日、**national association of decorative and fine arts societies** の教会で行う **record** に出かけてくると話したので、どのようなことをするのか尋ねました。古い教会の所蔵品の目録作りなのですが、会員が参加してこうした美術品を残す活動を草の根でやるのが、重要な協会の趣旨なのだそうです。彼女は随分前に入会金を払ったきりで、それ以降は立派な **Magazine** が送られてきて、自分たちの地域で開かれる講演などに参加することが出来るのですが、単なるカルチャー・センターの意味だけでなく、自分たちが積極的に美術品の保存に貢献していくという考えが浸透しています。イギリスだけで9万人の会員、300の支部があり、寄付などで活動を支えているということで、自分たちの文化を自分たちが参加することで保存、享受していくという積極的姿勢が顕著です。

同様に彼女の息子が **NGO** としてやっている若手音楽家の支援活動も、コミュニティーで演奏会を開催し、現代音楽の作曲家たちの作品を紹介し、自分たちの手で芸術家を育てていくという感覚が強く感じられます。息子さんの組織した文化週間のパンフレットには、詩の朗読、造形芸術のワークショップからコンサートに至る総合的な文化活動が展開されていることをうかがい知ることが出来ます。私は思わずこれらには国や地方公共団体の支援があるのか、と聞くと基本的にコミュニティーの自発的活動と基金に寄っているとの答えでした。実際、彼女が参加しているコンサート活動も、皇太子が名誉会長になっているものの、あくまで市民が主体的に活動を運営していて、上流階級の社交場とは異なるもののように思いました。チャールズ皇太子が出てきても、それ目当ての人は少なく、本人も控え目に参加者と接してコンサートを楽しむという風なようです。

これらの話は、何れも市民が参加し、自分たちが文化を創り、保っていくという自負を感

じさせます。EU をめぐる議論で最も欠けていたと私が（恐らく彼女も）思うのは、自分たちが EU へ参加して、しかも EU に依存するのではなく、自立的な市民であり続けるという方向性が殆ど見られなかったのではないかという点です。「どうせお前たちには分からないのだから、専門家の言っていることを聞いて、任せておけばいいのだ」という姿勢は、とりわけ投票時における保守党のオックスブリッジ出身エリート指導層に顕著で、知識人層も、「離脱派は無知蒙昧な先導されやすい輩」と見下していた感があるようにも、外から見ていえると思えました。ヨーロッパ大陸では EU の補助金で食っているような層がいるという情報は、自分たちで基金を調達し、自立的に活動を展開することに誇りを見いだす人たちにとって（仮に実際はそれなりの公的支援があったとしても）、少なくとも積極的にエリートや専門家の上から目線で語る「当然残留」論は空しく響いていたのかも知れません。

その後に行ったローマでも、イギリスで見た市民イニシアティヴをめぐる問題について考えさせられる経験をするようになりました。それは、9月3日にローマの友人たちが、ムッソリーニが **Monte Seratte** に建設し、ドイツ軍が駐留した **Bunker Tedesco** へ私を連れて行ってくれた際のことです。戦後になり、うち捨てられていた山をくりぬいた防空壕は、核シェルターとして歴代大統領とその家族の待避する場所として再利用されたのですが、更に破棄されて以降は、全く手つかずのままとなっていました。ところが、10代の地元の若者たちを中心に公開する動きが展開され、月に数回事前登録をした訪問者を案内するツアーが組織化されることになりました。驚くべきことに、軍の協力が加わって、戦後の戦車などが寄付されただけでなく、現在使っているミサイルまでが展示されていました。

ここでイギリスとの違いを痛感するのは、市民しかも非常に若い世代の自発的運営により、この試みが実現していること以上に、こうした活動に少なくとも国あるいは軍が全面的に関与したと思われる点です。その結果とも言えるのかも知れませんが、説明は軍事的解説が多く、最後には「この防空壕はドイツ・ブンカーと呼ばれているが、実際に最初建設したのはイタリア人だ」と誇って、ツアー参加者から拍手喝采を受けていました。核兵器それ自体の問題性や、ムッソリーニであれ、ドイツ軍であれ、大統領であれ、待避できるのは一握りのエリート層に過ぎないのではないか、という疑問を、まだ18歳というガイドをしてくれた青年に聞きました。彼はわざわざ我々だけを坑内へ連れ戻って、今日は時間がなかったから説明しなかったが、ここに広島の被爆者の手記を訳した文章がちゃんと示してあると見せてくれます。

確かに日本で例えば、松代大本営跡を10代の若者たちが公開する運動を展開して、それを実現してしまうということは、殆ど考えられませんから、イタリア人のバイタリティーを強く感じた一夜ではありました。それでも、イギリスのそれが文化的・平和的であるという点だけでなく、公的な補助を受けていないということが誇るべき意味として強調される方向性と、およそ無意味とも思えるような防空壕と無関係な戦車や軍用車などの展示が組み合わせられている方向性には相当の違いを感じた次第です。大陸ヨーロッパでの公と私が混在する活動の傾向性は、英米に見られる民間であることへの矜持と隔たりがあるように思

えますし、イギリスの EU 離脱のおける一つの特徴を象徴しているとも考えられます。

他方それだけに、新自由主義的流れが強まってくると、大陸ヨーロッパでも、こうした公私混同が大きな批判の対象になっているのも事実であるような気がします。例えば、イタリアの五つ星運動などは、従来の公的セクターによるお手盛りの浪費に対する徹底的な批判を展開しており、それがオリンピック誘致に反対するローマ市長の誕生を実現させたとも言えましょう。

実は、この公的セクターが逆に重要ではないかと思わせる事象も、同じイタリアにおいて、今年を目の当たりにする機会を得ました。10月21日より30日までのイタリア滞在中、日伊修好150周年記念シンポジウムに参加した後、ミラノで調査をした際のことです。調査を行った解放運動史研究所 (*Istituto Nazionale per la Storia del Movimento di Liberazione in Italia*) は、この財政難の折に、何とミラノ中心部の一等地 (すぐ近くにはベルルスコーニ系のメガバンクのビルや高級マンションが林立している地域) に新しい建物を建設し、こけら落としをしたばかりでした。実際の文書館はまだ郊外の旧建物にあって、調査をそこで行ったのですが、友人がこの研究所に務めていることもあり、引っ越し前の新文書館・図書館も見せて貰いました。

友人は高校の教員だったのですが、同文書館における若者へのレジスタンスを伝えていくプロジェクトに参加して、事実上、教員としての活動より、彼が望んでいた研究者的な仕事をむしろやっています。彼が私に語ったのは、何故イタリアにはこれだけレジスタンスに関する研究所や文書館が多いのかという理由でした。それは瞠目するような話ですが、既に戦争が終了する前のパッリ政権のときから、パルチザン関連政党は戦闘中にも拘わらず、自分たちの資料を保存する作業に着手し、しかも、内務省がこれを管轄することは、むしろ反動勢力による文書の破壊を招くとして、金だけは内務省に出させ、自立的な文書館建設を始めたというのです。

更にイタリア左派のすごみを感じさせるのは、ユーロ導入をめぐる民営化圧力に直面したダレーマ政権が行った対応です。それまで半官半民の銀行などの大企業を名目上は民営化させつつ、それまで政党やこうした研究機関 (多くが左派系) への公的資金をストックさせるためのファウンデーションを作って、市場経済の荒波から資金プールを守るという工作に成功しています。実際、それ以前の多くの研究機関などは、戦後に左派系の政治家たちによって創建されており、同研究所でこけら落としの展示に飾られていた強制収容所から帰還したユダヤ人たちのプロフィールの中にも、そうした事実を想像させる記述が見いだされました。事実、自分自身が2001年のトリノにおける「記憶の日」記念シンポジウムのラウンドテーブルで同席した **Bruno Vasari** の写真とプロフィールがそこには展示されており、戦後の国営放送 **RAI**、イタリアの岩波書店に匹敵する **Einaudi**、公共性の強い銀行 **Banca Nazionale del Lavoro** といった重要企業の要職を務めながら、2つの文書館を創設し、26巻に及ぶユダヤ人移送関連資料集を刊行した彼の足跡の一部も示されていました。

友人は必ずしも、そうした公的資金の政治家たちによる恣意的運用に好意的ではない部

分もありましたが、彼の所属する研究所自体がそうしたファンドを受けつつ、左派系の知識人再生産に寄与しているのも事実だろうと想像されます。今回の憲法改正国民投票において、ダレーマが同じ民主党の新自由主義的改革を推し進めるレンツィに反旗を翻して、彼を辞任に追い込んだのは、無論、政争的側面は強いですが、何となく想像に難くない動きだったのかも知れません。